

研究会「バングラデシュにおける金融包摂の現状と課題」

日時：2021年7月20日（火）12:30-15:00

会場：Zoomによるオンライン開催

司会：日下部尚徳（立教大学）

12:30-13:10

報告1：杉江あい（名古屋大学）

「マイクロファイナンス機関の“ローカル・ルール”から見る「金融包摂」の実態－バングラデシュタンガイル県南部の事例から」

13:15-15:55

報告2：石坂貴美（関東学院大学）

「金融サービスを巡る人びとのニーズとマイクロファイナンスの課題－バングラデシュラジシャヒ県の事例から」

14:00-14:20

コメント：藤田幸一（京都大学）

14:20-15:00 全体討論

参加方法：事前登録フォームにご記入ください。

<https://forms.gle/bnCtDQXQOPiDrkoQG7>

登録期限は7月19日（月）17時までです。

お問い合わせ：sugie.ai@b.mbox.nagoya-u.ac.jp

主催：科研費・基盤A「現代南アジアにおけるムスリム社会の多極化の傾向」（19H00554、代表者：外川昌彦）



◆趣旨◆

日本の頼母子講のように、金融を巡る共同的な仕組みは特定の時代や地域に限らず広く見られるが、1970年代頃から、第三世界でフォーマルな金融制度から排除されてきた人びとに少額の融資を貸し付ける動きが活発化した。その中でもグローバルな開発業界において脚光を浴びたのが、「世界一巨大なNGO」と言われるBRACや、「貧者の銀行」を謳うグラミン銀行による、土地なし層や女性をターゲットにしたバングラデシュ発のマイクロファイナンス（MF）・プログラムである。これらは同国でスケールアップしていく一方、様々な国々に「移植」された。とりわけマイクロクレジット（MC）は「貧困の特効薬」としてもはやされる一方、その収益が資金繰りに悩む開発援助機関の財政的自立性を保障するものとして、需要サイドにも供給サイドにもメリットのある革新的な手法とされた。

しかし、1990年代頃からマイクロファイナンス提供機関（MFIs）の財政的自立性のみが重視され、2000年代半ばからは、国外の基金や投資家等の民間による多額の投資がMF産業に向けられ、MFIsの成長と競争が進んだ。このようなMF産業の商業主義的傾向が強まるにつれ、その弊害として、多重債務や厳しい取り立てを苦にする自殺や反MF運動が2010年代前後に各国で起こった。これを受けてグローバルな開発言説は、MCからMFへ、そしてMFから金融包摂へとシフトした。すなわち、融資だけでなく貯蓄や保険などの他の金融サービスを充実させ、これに万人を包摂することを称揚するようになったのである。バングラデシュでもMC偏重への批判が高まり、貯蓄や保険などの重要性が指摘されるようになった。政府は2006年、様々な機関による無秩序なMC貸し付けに対してMC規制機関（Microcredit Regulatory Authority）を設立し、各種の規制を設けた。融資の借入者数が頭打ちとなった同国の大手MFIsは、貧困層向けの小規模融資から、やや高額の小規模起業家向け融資（Small Enterprise Loan）や貯蓄志向への転換をはじめ、諸制度を変更・再編して対応した。このように、かつて「貧困削減」の名のもとに実施されてきたバングラデシュのMFは、今日その様相を変化させている。しかし、既存研究では、なおMFや「金融包摂」の貧困削減効果に関する議論が主流であり、このような経営構造の転換の意義や課題、また需要サイドから見た貯蓄のニーズや役割などについては十分に議論されていない。

本研究会では、上記のようなMF産業および制度の変化が、ローカルなMF運用において、強制的な融資の貸し付けや貧しい集落からのMFIsの撤退といった現象となって現れていることを報告する（報告1）。また、ローカルな人びとの多様な実践を通じて、貯蓄を巡るMFIsと利用者のニーズの乖離や金融サービスに関するトラブル、MFIsのスタッフが抱える課題等について報告する（報告2）。そして、2つの報告およびアジア各国の事例などをもとに、バングラデシュにおける金融包摂はどのような方向を目指していくのか、そこにはどのような可能性と限界があるのかを議論する（コメント）。